

『狐物語』Roques 版の最終巻

原野 昇

『狐物語』の校訂版は、Méon 版、Martin 版、Roques 版、Fukumoto-Harano-Suzuki 版に、本誌の前号で紹介した Pléiade 版が加わったと言ってきたが、実はそのうちの Roques 版は未完結であったのである。このほど待望久しかったその最終巻の第 7 巻が刊行された。Le Roman de Renart, Branche XX et dernière éditée par Félix Lecoy, Champion (CFMA, 132), 1999 である。第 6 巻が出てから実に 36 年ぶりであった。ちなみに Roques 版の第 1 巻は 1948 年に刊行され、続いて第 2 巻 1951 年、第 3 巻 1955 年、第 4 巻 1958 年、第 5 巻 1960 年、第 6 巻 1963 年に刊行されたが、校訂者 Mario Roques (1875-1961 年) の死によって中断したままになっていたのである。Mario Roques 亡きあと、残された『狐物語』最終枝篇の校訂は誰かが完成させなければならなかった。それは Roques のあとを継いで *Romania* 誌の編集主幹(発行人)となった Lecoy 氏をおいてはほかになかった。Lecoy 氏自身そのことは心得て、早くからこの仕事にとりかかり、大方の仕事を終えていた。その時点から周囲はいつ出るか、早く出ないかと心待ちにしていた。しかしいつまで経っても出なかった。Collège de France を引退されて (1975 年) も、『ばら物語』の校訂本出版¹⁾が終って (1976 年) も出なかった。80 才を過ぎて (1983 年) も、『Lai de l'ombre'²⁾、*Vie des Pères*³⁾、*Trisatan*⁴⁾の校訂本は出ても、『狐物語』の最終巻は出なかった。

それは Lecoy 氏が『狐物語』をながしろにしたからとか、まして他人の仕事の後始末だから後回しにしたというのでは決してない。逆に偉大なロマン語文献学者 Mario Roques の名を汚すまいと思えばこそ、ほぼ完成している原稿にさらに手を加え、より優れた校訂本を目指し続けたからにはほかならない。それほど Mario Roques は偉大であり、それほど Lecoy 氏は校訂の仕事に厳しかったのである。

フランスにおける近代ロマン語文献学の泰斗 Gaston Paris (1839-1903) の名は高等実習研究院 Ecole Pratique des Hautes Etudes 第 4 部門の建物にも残り、今でも Gaston Paris の胸像が置かれた「ガストン・パリスの部屋」Salle Gaston Paris と呼ばれる教室で、ロマン語文献学およびフランス中世文学の授業は行われている。その Gaston Paris が Paul Meyer (1840-1917) とともに 1872 年に創刊した *Romania* はロマン語文献学の最新の研究成果が発表される最重要雑誌として、130 年近く経った今日まで受け継がれている。

Gaston Paris のあとを継いだのが Joseph Bédier (1864-1938) である。Joseph Bédier と Gaston Paris の師弟関係については一度言及したことがある⁵⁾。また最近 Joseph Bédier の業績を総覧する浩瀚な研究が発表され出版された。Alain Corbellari, *Joseph Bédier, écrivain et philologue*, Genève (Droz), 1997, 765p である。これは 1996 年にパリ第 4 大学に提出された学位論文である。

Joseph Bédier のあと、Mario Roques, Félix Lecoy 氏へと *Romania* の編集は受け継がれてきた⁶⁾。フランス中世文学作品の校訂方法をめぐり、Joseph Bédier が師の Gaston Paris と厳しく対峙する発端になった *Lai de l'ombre*⁷⁾ を Lecoy 氏が再び取り上げ、70 才を過ぎて世に問うたことも感慨深いものがあった。

偉大な先達 Mario Roques のやり残した仕事を世に出さなければならぬと考え、早くから手掛け、ほぼ完成させていたにもかかわらず、より理想的な校訂本に仕上げようといつまでも修正し続けていた Lecoy 氏が、90 才を越え、残された時間があ

まりないことを直感した時点で原稿を印刷に回し、もって歴史に対する責任と使命とを果たしたのである。Lecoy氏は1997年11月に94才（厳密には93才11か月）で亡くなったので、出版されたこの校訂本を見ていない。Lecoy氏最後の仕事である。その意味でLecoy氏によるこの『狐物語』Roques版第7巻の刊行は、フランスにおけるロマン語文献学の歴史に残る記念碑的出版となった。校正などを手伝ったJean Dufournet氏の名前がこの本の中に一度も出てこないことも含め、感銘深い出版である⁸⁾。

注

¹⁾ *Le Roman de la rose*, édité par Félix Lecoy, t.I (CFMA 92), 1965; t.II (CFMA 95), 1966; t.III (CFMA 98), 1976.

²⁾ *Le lai de l'ombre*, édité par Félix Lecoy, (CFMA 104), 1979.

³⁾ *La vie des Pères*, édité par Félix Lecoy, (SATF) t.I, 1987; t.II, 1993.

⁴⁾ *Le Roman de Tristan* par Thomas, édité par Félix Lecoy, (CFMA, 113), 1991.

Les deux poèmes de la Folie Tristan, édité par Félix Lecoy, (CFMA, 116), 1994.

⁵⁾ 原野昇「フランス中世文学作品の校訂について」『広島大学文学部紀要』43巻（1983）pp.299-315, 特にpp.303-304 および注25)。なお松原秀一「フランス中世文学の写本と校訂法—ベディエの立場を廻って—」『芸文研究』第69号（1963）, pp.107-121も参照。

⁶⁾ 創刊以来の*Romania*の編主幹は下記のとおりである。

- t.1 (1872) – t.32 (1903) --- Paul Meyer et Gaston Paris
- t.33 (1904) – t.35 (1906) --- Paul Meyer et Antoine Thomas
- t.36 (1907) – t.40 (1911) --- Paul Meyer
- t.41 (1912) – t.81 (1960) --- Mario Roques
- t.82 (1961) – t.96 (1975) --- Félix Lecoy
- t.97 (1976) – t.116 (1998) --- Jacques Monfrin

なおt.116(1998)の3-4^e fasciculeはMonfrin氏の急死（1998年12月）の前に印刷に回されていた。t.117(1999)以降はGeneviève AsenohrとMichel Zinkの共同編集という体制になった。

⁷⁾ Joseph Bédier, *La tradition manuscrite du lai de l'ombre – réflexion sur l'art d'éditer les anciens textes*, Champion, 1929.

⁸⁾ *Romania*, t.116 (1998), pp.1-2にJacques Monfrin氏による, また*Reinardus*, vol.11(1998), pp.241-242にGabriel Bianciotto氏による, いずれも感銘深いFélix Lecoy追悼文が掲載されている。